

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 五十嵐孔一 印

学位申請者 金 恵珍（キム・ヘジン）

論 文 名 動詞由来名詞を含む複合名詞に関する日韓対照研究
—動作性と意味解釈を中心に—

【審査結果】

金恵珍氏から提出された博士学位請求論文“動詞由来名詞を含む複合名詞に関する日韓対照研究—動作性と意味解釈を中心に—”について、論文審査と口述による最終試験(公開審査)の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士(学術)の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、最終試験は2023年2月20日(月)14時30分から約2時間をかけて、Zoomによるオンラインで実施された。審査委員会は、五十嵐孔一(主査)、南潤珍(主任指導教員)、風間伸次郎、趙義成、早津恵美子(名古屋外国語大学世界教養学部国際日本学科教授、東京外国語大学名誉教授)の5名から構成された。

【論文の構成】

本論文の構成は以下の通りである。

I 序論

第1章 はじめに

第2章 動詞の名詞化と動作性

II 本論

第3章 [V+N]型複合名詞の動作性

第4章 [N+V]型複合名詞の語構成と動作性

第5章 [N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズム

第6章 その他[Pref+V][Ad+V][A+V]型複合名詞の動作性

III 結論

第7章 おわりに

【論文の概要】

日本語と韓国語の動詞に由来する名詞を含む複合名詞の中には機能動詞(日本語は「する」、韓国語は「하다(hata)」)と共起できる例が存在する。機能動詞と共起する名詞は「広い意味での動作性(行為・過程・状態・現象)の名詞」と考えられる。本論文はこの動作性に注目し、日本語と韓国語における動詞由来複合名詞が動作性名詞となる意味的・文法的条件について論じたものである。

各章の内容は以下の通りである。

I 序論の第1章では研究の目的と研究対象及び研究方法を明らかにし、先行研究における動詞由来複合語の語構成について概観している。第2章では両言語における動詞の名詞化(日本語の動詞連用形名詞と韓国語の動詞派生名詞)と動作性について概観し、本論文における動作性という概念を語彙的・文法的な性質の側面から定義したうえで、動作性名詞の判断基準を提示した。

II 本論には第3章から第6章が含まれている。

まず、第3章では[V+N]型複合名詞について考察している。日本語では「寄り道」「回り道」、韓国語では「지름길(cilum-kil; lit.突っ切り-道→近道)」「갈림길(kallim-kil; 分かれ-道)」などの例がある。まず、先行研究を概観し、両言語における[V+N]型複合名詞の動作性について考察した。その結果、日本語では[V+N]型複合名詞の内部構造が修飾関係だけでなく、項関係にも現れるため動作性を帯びることがあるが、韓国語の[V+N]型複合名詞の内部構造は修飾関係にのみ現れるため、動作性を帯びることがないことを明らかにした。また、日本語母語話者(30名)のアンケート調査から、日本語の[V+N]型複合名詞には動作性名詞及び非動作性名詞だけでなく、これらの中間的存在と言える準動作性名詞があることを確認した。これは日本語の[V+N]型複合名詞の動作性には連続的段階性があり、より動作性名詞に近いものと、より非動作性名詞に近いものがあることを示唆している。

第4章では[N+V]型複合名詞について考察している。日本語では「花見」「羊飼い」、韓国語では「달맞이(tal-mac; lit.月-迎え→月見)」「눈싸움(nwun-ssawum lit.雪-戦い→雪合戦)などである。先行研究を概観し、両言語における[N+V]型を前項名詞と後項名詞の文法的関係から「主語-述語」「目的語-述語」「副詞語/付加語-述語」の3つの類型に分けて考察した。その結果、日本語では全ての類型で動作性を帯びることがあるが、韓国語では「目的語-述語」「副詞語/付加語-述語」の類型においてのみ動作性を帯びることができ、特に「副詞語/付加語-述語」型では「必須的副詞語-述語」の項関係にある場合に限り、動作性を帯びることを明らかにした。つまり、日本語では項関係にあるか否かにかかわらず、

前項名詞と後項動詞の関係によって動作性を帯びるのに対し、韓国語では項関係にある場合にのみ、動作性を帯びるのである。

第5章では意味転移の観点から、複合名詞に意味転移が起きるとその動作性が消え、実体性の意味を表すようになるという「意味転移仮説」を立て、動作性名詞が実体性名詞として解釈されるメカニズムを提示した。つまり、[N+V]型複合名詞(日本語では「舵取り」、韓国語では「고기잡이(koki-capi; lit.魚-とり→漁労、漁師)」)は後項動詞(取る/잡다(capta; とる))の項(動作主、対象)のうち、複合名詞の内部で満たされていない項(動作主)の意味として解釈されるのである。また、実体性だけを表す非動作性名詞にも同じ意味解釈のメカニズムが適用できることを確認した。一方、両言語の[N+V]型複合名詞で動作性名詞でありながら実体性名詞として共存できる例は「動作主、道具、結果」の意味として解釈されるが、実体性名詞としてだけ用いられる非動作性名詞の例はほぼ「動作主、道具、道具・場所、対象、結果」の意味として解釈された。この中で「道具・場所、対象」の意味は非動作性名詞にのみ現れる。また、これらの後項要素にはほとんど三項動詞が来る。日本語では後項要素が三項動詞の場合でも前項要素が「場所」として解釈される場合には動作性を帯びることがあるが、韓国語では後項要素が三項動詞である場合には動作性を帯びることができず、実体性の意味だけを持つようになる。このことから、韓国語では後項動詞の内項が複合語内で全て満たされたときにのみ動作性を帯びることができると分かる。

第6章では[Pref+V]型、[Ad+V]型、[A+V]型の複合名詞の動作性について考察した。日本語と韓国語の例は、[Pref+V]型には「相乗り」「大急ぎ」や「늦잠(nuc-cam; lit.遅-寝→寝坊)」「선걸음(sen-kelum; lit.生半可な-歩き→出かけたついで)」、[Ad+V]型には「うたた寝」「但し書き」や「높이뛰기(nophi-ttwiki; lit.高く-跳び→高跳び)」、そして[A+V]型には「厚着」「幼馴染み」や「어슷썰기(esus-sselki; lit.斜め気味-切り→斜めに切ること)」などである。[Pref+V]型は両言語で後項要素が動作性名詞として現れることが多いため、[Pref+V]型そのものが動作性を帯びるとは考えにくい。[Ad+V]型と[A+V]型については、日本語では[Ad+V]型の生産性がやや落ちるものの[A+V]型が発達し、動作性名詞を主に形成する。これに対し、韓国語では[A+V]型はほとんど生産性が無いが、[Ad+V]型が発達し、主に動作性名詞を形成する点が特徴的である。両言語の[Ad+V]型の考察から、後項要素に非能格動詞が現れるときは動作性を帯びにくいことが分かった。ところで、日本語の[A+V]型の後項要素には自動詞だけでなく他動詞も現れ、動詞の種類にかかわらず動作性を帯びている。このことから、日本語の[A+V]型は動作性名詞の語形成における意味・文法的な制約から比較的自由で

あることが分かる。

Ⅲ 結論の第7章では研究成果をまとめ、本論文の意義と今後の課題について述べている。本論文の考察から、動詞由来複合名詞が動作性を帯びるためには、日本語では構成要素の動詞の「対象」以外の内項が複合語内で全て満たされなければならない、韓国語では構成要素の動詞の内項が複合語内で全て満たされなければならないことが明らかになった。日本語の動詞由来複合名詞は動詞由来複合語の語構成の制約から比較的自由であるが、韓国語の動詞由来複合名詞は主要部の動詞の外項以外の必須項、すなわち内項は複合語内で全て満たされなければならないという動詞由来複合語の語形成規則に従うときに動作性を帯びることができると言える。そして、動作性と意味転移という観点から日本語と韓国語の動詞由来複合名詞を考察することにより、複合名詞の類型および前項要素と後項要素の意味・文法的関係が複合名詞の動作性や意味を決める重要な要素であることを明らかにした。

動作性と意味転移という観点は、従来は無かったアプローチである。動詞由来複合名詞の語形成と意味解釈のメカニズムを、この新しい観点から考察したところに本論文の意義があると言うことができる。ただし、本論文では[V+N]型と[N+V]型が主な考察対象であり、[Pref+V][Ad+V][A+V]型については例が十分に集まらず、使用頻度も低いため動作性の判断が困難なところが認められる。また、本論文で提示した[N+V]型を中心にした意味解釈のメカニズムは[N+V]型以外にも適用の可能性がある。さらに、本論文の対象外だった[V+V](動詞+動詞の名詞形)型においても同一の意味解釈のメカニズムが適用し得ることが予想される。これらについては今後の課題である。

【審査の概要】

審査でははじめに金恵珍氏により提出論文の概要説明があり、その後、各審査委員との質疑応答が行われた。

本論文の内容について、審査委員が高く評価できるとした点には次のようなものがある。

- (1) 本論文の主要概念である複合名詞、動詞由来名詞などに関する国内外の先行研究を非常に幅広く読みこなし、研究の基盤を着実にしている。また、日本語と韓国語のデータベースを駆使し、豊富な資料を対象とするとともに、各言語の母語話者に綿密なインタビューを行って検討を進めており、得られた結論は強い説得力がある。
- (2) 用例を綿密に、かつ丁寧に分析し、動作性の有無とその理由を明らかにしている。さらに、両言語で動作性を帯び得るタイプを分類し、細かい条件を詳細に論じており、その結果は今後の外国語教育にも有益だと思われる。

(3) 従来の対照研究では翻訳資料を扱うことが多かったが、本論文では各言語の資料を対象に分析し、そこから得られた結論を対照する方法で研究を進めている。客観性があり、より信頼できる結果であり、今後の対照研究の一つの模範となり得る。

一方で、以下のような点が改善すべき点、あるいは検討を要する点として指摘された。

- (1) 結論の導き方が論理的でないところが散見される。事実の説明から結論に至る過程で、その必然性に対する記述を論理的に展開する必要がある。
- (2) 本論文ではかなり多くの考察内容を読まない最後まで結論が分からない構成となっており、まず結論を示してから議論を展開する、といったトップダウン式の論述の方が論文の読みやすさをより向上させたのではないかと判断される。
- (3) 主要な用語の定義が不十分なものがいくつか見られる。例えば、「語彙的な意味」と「カテゴリーカルな意味」との区別が不明瞭であること、「意味転移」の定義がかなり後部に現れており、「意味変化」と混乱しやすいことなどがあげられる。
- (4) コーパスには web に書かれたものも資料として含まれており、その用例の適切性について、より慎重に検討する必要があるものがあつた。

公開審査においては、以上のような評価すべき点、そして改善すべき点や検討を要する点が指摘された。金恵珍氏からは質問に対して詳しい説明がなされ、分からない点については今後の研究課題として取り組んでいきたいとの誠実な回答が得られた。総合的には本論文が学位論文として学術的に非常に重要な成果を含んでおり、本学の博士学位論文の評価基準を満たしていることが認められた。

公開審査終了後、博士論文の審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が本学の博士学位論文としての評価基準を十分に満たしていることを確認し、金恵珍氏に博士(学術)の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。